先人の知恵から
49

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

今回は「ひ行～ふ行」から以下の１１個。引き続き飛ばし気味で書いていきます。最後まであと少し、どうぞお付き合いください。

- **人の噂も七十五日**
- **人の口に戸は立てられぬ**
- **人の振り見て我が振り直せ**
- **人は人中、田は田中**
- **人は見かけによらぬもの**
- **人を知る者は智なり、**
  自ら知る者は明なり
- **百聞は一見に如かずｚ**
- **火を乞うは燧を取るに若かず**
- **夫婦は会わせ物離れ物**
- **覆水盆に返らず**
- **福は無為に生ず**

＜人の噂も七十五日＞

世間で人があれこれうわさをするのも一時的なもので、しばらくすると自然に消えてしまうということ。

＜人の口に戸は立てられぬ＞

世間の噂は防ぐことができないということのたとえ。家の戸を閉めるように人の口の戸を閉めることはできないという意から。「世間の口に戸は立てられぬ」ともいう。

二つの諺についてまとめて書こうと思う。というのも、この二つはリンクすると思うからである。

人の噂は、最近では SNS で広がるため、素早く、そしていつまでも広がり続けるイメージがある。また更にオヒレハヒレが付いて拡散していく。

今は小学生に至るまでスマホを持っているし、簡単に勝手なことを流すことができる。フェイク動画や偽情報も簡単にできる。怖い時代である。そうして流される嘘や噂に、子どもたちはつらい思いをする。

ただ、１週間も経てば別の話題に移っていくのも事実だ。情報の伝達は早いが、興味が失われるのも以前より早くなっている。子どもたちは悪い噂や誹謗中傷を SNS で流されることに戦々恐々としていて、とにかく良い人を演じ続けている。

それでも失敗してしまうことはある。すると子ども達はまず不登校になる。人との関係を修復する、謝罪して何とかとりなす、などと言った人間関係の立て直しが難しい。

そこでこの諺を出して、しばらく学校を休んでいたら、学校に行ったときに思い出されるけど、数日我慢したら、それでその話以外の話題に子どもたちは切り替わってしまうものだと伝えている。学校に行けない日が長くなればなるほど戻りにくくなるのだから、休んでも数日から１週間で戻れればと思っている。謝る時のセリフも考えて、練習もして戻すなどと言うことをやっている。もしその子が悪くなければ、例えばいじめられているなどであれば、それは全く別の問題だし、学校に行けなくなるのはむしろおかしいという話をするし、学校とも話していくことになるだろう。

この諺、「人の噂は１週間」「つぶやきは止められない」などと変えたらよいのかな？

英語では・・・

A wonder lasts but nine days.

（不思議に思うというのも九日だけ）

＜人の振り見て我が振り直せ＞

人の姿や行動を見てよいところを見習い、自分の姿や行動を改めよということ。

人の悪いところばかりを探してあげつらう子は多いが、人の良いところを見ようとする子は少ない。自分が良いと思う言動、良いと思う人を真似ていくことで、自分もその人のようになっていく。勿論最近のフェイクに騙されてはいけないが、良いところを見ようとする力をつけることが、今の社会で大事なのではないかと思う。

悪いところというのは目立つもので見つけやすい。だからこそ、良いところを見つけてほしい。又反面教師的に、悪い言動をまねしないように自分を戒めてほしいと思ってこの諺を子どもたちに伝えている。

英語では・・・

It is good to beware by other men`s harms.

（他人の受けた禍によって警戒心を強くするのは良いことである。）

Learn wisdom by s the follies of others.

（他人の愚行によって英知を学べ）

Learn from others’ mistakes.

（他人の失敗から学べ）　ともいう。

＜人は人中、田は田中＞

人は大勢の中でもまれ鍛えられるのがよく、田はほかの田に囲まれた田が良いということ。

インクルーシブ教育というのがある。一方で支援学級、支援学校というのがある。子どもたちが学校でその子の能力・特性に応じた教育を受けることは大事である。しかし、一般の子どもたちと離してしまったら、社会に出た時に困ることが多い。社会はまだ未熟で、発達特性を持った人への対応が不十分である。

ある学校で発達特性があって切れやすい子を、全く隔離して１年間過ごさせていた。その子は１年間、殆どろくな教育も受けず、放っておかれたのである。その結果、社会性は育たなかった。その後進学したものの、１年間のハンディは大きく、進学先では問題行動の嵐となった。

たとえ少人数でも良い。同年代と関わりながら、トラブルを起こしたとしてもその行動を見直し、反省し、修正して行くことで社会性が育つのである。人は人の中でしか育たないのである。

問題行動を起こしている子の対処に困っている通常学級の先生方にこの諺を送りたい。

＜人は見かけによらぬもの＞

人の能力や性格などは、外見だけでは判断ができない。人は外見に似ず、意外な一面を持っているものだということ。。

子どもたちも保護者も、好き嫌いが結構はっきりしてきたと思う。好き嫌いを言えることを否定するものではないが、人に対して直感的に合う合わないを決め、そこからまず譲らない。見た目だけで決めてしまうのと同じである。確かに見た目で生理的に苦手と思うこともあるだろう。しかし、話してみたら違ったということがあるのも事実である。関わっても見ずに、最初から毛嫌いしたり、避けたりするのは違うのではないか。

身なりも大事にすべきではあるが、穴の開いたジーンズをはいていたとしても、それはファッションだし、ピアスをいっぱいつけてるからヤンキーということではないし、刺青をしているから反社会的な人（暴力団）というわけではない。

最近は年寄りには理解しがたいファッションも多いから、見た目で決められたら大変である。先ず、関わってみよう、話してみよう！そしてその人をある程度理解してから好き嫌いを決めても良いのではないかと思う。毛嫌いしてきた人の中に、もしかしたら自分にぴったりの友達がいたかもしれないのだから。

英語では・・・
Appearances are deceitful.（外見は当てにならない）

＜人を知る者は智なり、
自ら知る者は明なり＞

人の賢愚を見分けることのできる者は知者であり、自分自身を知り、正しく評価できる者は知者より優れた明者であるということ。明＝聡明の意。　　出典　老子

自分自身というのはわかりにくいものかもしれない。自分を知るのは他人の目を通じてとも言われている。自分が良くわからないという人もいる。「自分」は色々あるのが普通だ。「だらしない自分」「真面目な自分」「頑張る自分」「さぼりたい自分」「意地悪な自分」「気弱な自分」etc.

いろいろな「自分」をある程度まとめて、これが「自分」というのを感じているだけである。本当のところ、自分自身を知るのは人に言われて「そうかな？そうかも」と思って、「これが自分」と思っているのかもしれ

ない。でも人に言われても「違うな」と思うこともあるだろう。

結局自分を知るには、自分としっかり向き合い、自分の悪いところも良いところもすべて認めた上で、こういう自分でありたいという方向でまとめ上げるということになるだろう。

自分の弱さ、情けなさ、悪意もすべて受け入れることが一番大事なのではないだろうか？ダメな部分嫌な部分を否定して、良い部分だけで自分を造ろうとしたらそれはとても苦しい自分になってしまうだろう。もっと自分のダメなところを認めてあげてほしいという思いから、子どもたちに伝えている。

＜百聞は一見に如かず＞

百回繰り返して聞くよりも、たった一度でも自分の目で見るほうが確かであるということ。「千聞は一見に如かず」「耳聞は目見に如かず」ともいう。

最近はインターネットで何でも調べられるし、景色とかも写真で見ることができる。だから人から聞くだけで理解するということは少なくなったかもしれない。大抵の人はネットで調べるから。しかし、どんなに情報を集めても、どんなに調べても、実際にその場所に行って、観たり感じたり触れたりすることは、ネットで調べるだけとは全く違う。

食べ物一つとってもそうだろう。あそこの何とかがおいしいという情報はいくらでもネットに流れている。人気ランキングとかもある。それに乗せられて食べに行ってみたら、それほどおいしくなかったという経験を持つことも少なくないだろう。学校で習ったことも含め、訊いた話、テレビやネットで見聞きしただけではなく、出来るだけ実際に体験したり、観たりしてほしい。ネット情報に頼る傾向の多い子どもたちには、この諺と一緒に「動け！」と言い続けている。

英語では・・・

Better have it than hear of it.
（話を聴くより体験するほうがよい）

Seeing is believing.
（見ることは信じること）

＜火を乞うは燧を取るに若かず＞

人を当てにするよりも、自分で努力してやったほうが確実であるということのたとえ。人に火種をくれと頼むよりも、自分で火打ち石を使って火おこした方が良いということから。燧＝火打ちの道具。
出典ではこの後に、「汲を寄するは井を鑿つに若かず」（水を他人に頼るのではなく、自分で井戸を掘ったほうが良い）と続く。　出典　淮南子

人を当てにすると思った通りの結果を得られないので不満を持ったりイライラしたりすることが多くなる。人を当てにするときはその結果に期待しないことが肝心である。自分基準の結果を相手に求めるのはある意味わがままではないか。

もし、自分が求める基準の結果を得たい

なら自分でやるのが確実である。他人にお願いしたら、結果の良しあしに関わらず、やってくれてありがとうという気持ちになれれば、イライラすることもがっかりすることもない。そうした心構えを伝えるために、この諺を使っている。大昔から人は同じことを繰り返しているのだなと改めて思う。

＜夫婦は合わせ物離れ物＞

夫婦はもともと他人同士が一緒になったものだから、別れることがあっても仕方がないということ。

夫婦はもともと婚約届という紙切れ一枚の契約関係である。契約は破棄されることがある。

生まれも育ちも違う者同士が一緒になって、そう簡単に上手くいくはずはない。ぶつかり合うことも憎み合うこともあるだろう。子どもが居ると、「子は鎹」でお互い我慢できることもあるが、子どもが大きくなって巣立ったら熟年離婚になったりする。夫が退職したらその日に離婚という話もよくある。

家族という形を考えた時、カップルから夫婦になり、子どもが生まれて父母になる。夫婦の役割は解消したとしても父母の役割は解消できない。これは契約ではないから。親子の関係は一生である。そこを守れるのなら、夫婦の契約は破棄されても特に問題はないが、憎み合って別れるのは子どもにとって良くない。子どものためには自然消滅的な円満離婚が一番であろう。

＜覆水盆に返らず＞

一旦離婚した夫婦の仲は、もとにはもどらないということのたとえ。転じて、一度してしまった失敗は、とり返しがつかないことのたとえ。一度こぼれた水は、二度ともとの盆に戻らないということから。覆水＝こぼれた水。　　出典　拾遺(しゅうい)記

離婚した夫婦は元には戻れないという意味で作られた諺だが、一般的には一度こぼれてしまった水は戻らない、則ちやってしまったことは取り返しがつかないという意味で使われていると思う。筆者もやってしまったことは仕方がないという意味で使っている。

いつまでもやってしまった失敗をくよくよ考えている子に時々出会う。確かにあそこであしなければよかった、こうすれば良かったと反省しきりになるのはわかる。反省することが悪いわけではないが、要は次をどうするかであろう。

いつまでも後ろばかり見ていても前には進めないのだ。「次は同じ失敗をしないぞ、次はこうしよう！」そういう風に考えさせるために、この諺を使っている。

ゲーム感覚で人が死んでも生き返ると思っている子がいる時代である。動画では巻き戻しも可能で、こぼれた水が元に戻ったりする。実際にこぼれた水は戻らないということを体感させる必要があるかもしれない。ミルクはこぼれると後が大変だから、水でも実際にこぼしてみせるか。

英語では・・・

It is no use crying over spilt milk.

（こぼれたミルクのことを嘆いてもむだで

ある）

Things done cannot be undone.
（一度なされたことはもとに戻せない）

＜福は無為に生ず＞

幸福は、手に入れようと追い求めたりせず、無欲に生きている人のところにやってくるということ。出典にはこのことばに続いて「患(うれ)いは多欲に生じ、害は備えざるに生じ、穢(え)は穢(のぞ)かざるに生ず（わざわいは欲望が深いところに生じ、損害は備えがないために生じ、田畑の荒廃は雑草を除かないために生じる）とある。　　出典　淮南子

「幸せになりたい」と誰もが思う。それは自然な感情だろう。「お金持ちになりたい」と思うから宝くじを買う。では宝くじに当たったら幸せになれるのか？実際宝くじに当たった人が凄く幸せになったという話を聴いたことが無い。小当たりなら良いかもしれないが、１億２億というお金を手に入れたら、よく知らない親戚までがお金をせびりに来ると聞くし、あちこちから寄付の話も届くそうだ。そんなこんなしていたらあっという間にお金が無くなったと。所詮あぶく銭なのかもしれない。

無欲でいるということは、あれが欲しい、あれが食べたい、あそこに行きたい、などと言う欲が全く無いわけである。今のままで足りている、つまり「足るを知る」わけで、そうしたら、心も体も満たされていて、何も不自由は感じないだろう。

それこそ「幸せ」であろう。幸せになりたくてなるのではなく、足りていれば、気づけば幸せになっているというものだ。

そんな自分でありたいという思いを込めて選んでみた。

出典説明

老子・・・春秋戦国時代の思想家。道家の祖。姓は李、名は耳(じ)、字は聃(たん)（一説には伯陽）。老子は尊称。周の図書室の書記官だったが、周末の乱世を逃れて西方の関所を通った時、役人に頼まれて『老子道徳経（老子）』二巻を著したという。

淮南子・・・内編二十一巻

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は、前漢の高祖劉邦(りゅうほう)の孫である淮南王劉安(わいなんおうりゅうあん)。無為自然の道家思想を中心都市、政治・軍事・天文・地理などにわたって諸学派の説を収めている。内編二十一巻・外編三十三巻があったとされるが、現存するのは内編二十一巻。

拾遺記・・・１０巻

中国の後秦の王嘉が撰した志怪小説集。上古より東晋に及ぶ小稗伝の類を収めている。（志怪小説とは漢魏六朝時代に記述された神鬼など各種の奇怪な話の小説を指す。古代神話、伝記が源となっている。その発生は、当時の社会の不穏不安、宗教や迷信の流行、鬼神の大げさな語り、回忌を説くという社会の気風と関係がある。《大阪大学》）

参考文献：以前にも掲載したが、此処に載せている故事・諺及び出典説明は「新明解故事・ことわざ辞典」三省堂編修所編　より転載させていただいている。